第一セット　ブルンジャー参上！

夏。彩沢（さいさわ）市。

「チョウッ！　チョウッ！」
「キャアアッ！　助けて！」
「何だッ!?　コイツら！」

平日の昼間。突然、繁華街に謎の集団が現れ、暴れ出す。白い仮面をつけ、全身を黒タイツで覆っている。

彼らは闇の百八軍の戦闘員――。

地球征服を目論む宇宙からやってきた悪の軍団・闇の百八軍。ここ日本でも百八軍の侵略に市民たちは苦しめられていた。

市民たちは神に祈り救いを求めた――

そのとき――!!

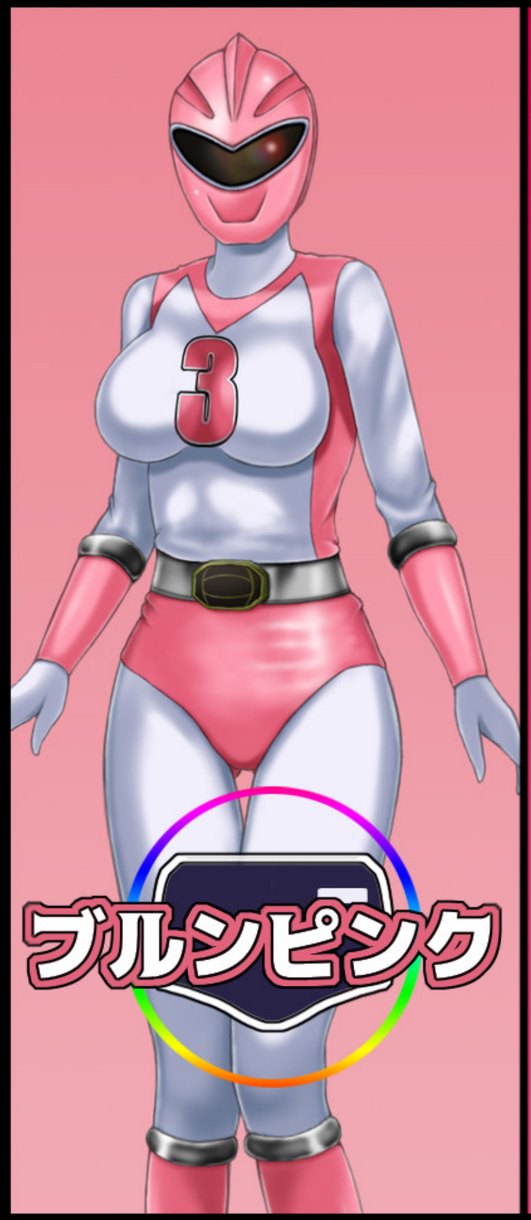
「アナタたち、おいたが過ぎるわ！」

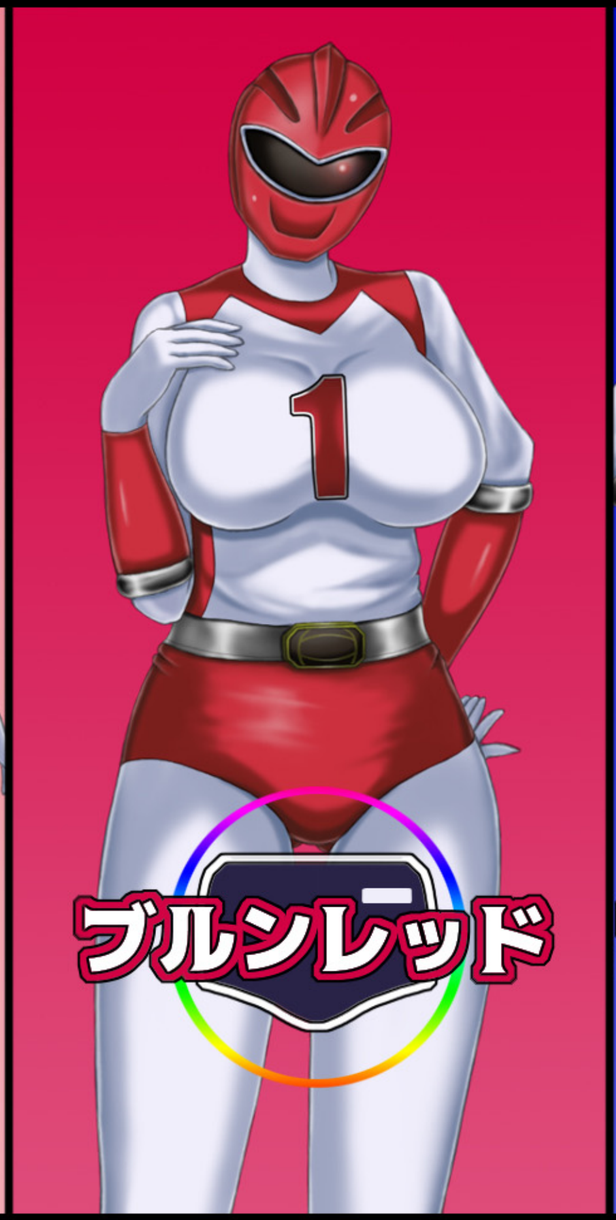
市民たちの目の前に、これまた突然、マスクで顔を隠した謎の三人が現れた。
全身を素肌にピッタリと密着するボディスーツに包み、身体の輪郭が浮き彫りになっている。その姿を見た者は皆、あの人たちは女性であると認識するだろう。そう乳房や、むっちりしたヒップの形が露になっているからだ。

「わたしたちの街を好き勝手やってくれちゃって……」
ピンク色を基調とするボディスーツの女が、一歩前に出る。そしてブルー。
「何て悪い子たちなのかしらっ！」
さらにレッドが二人より前に出て声を上げる。
「私たちが相手して上げるから、覚悟なさいっ！」

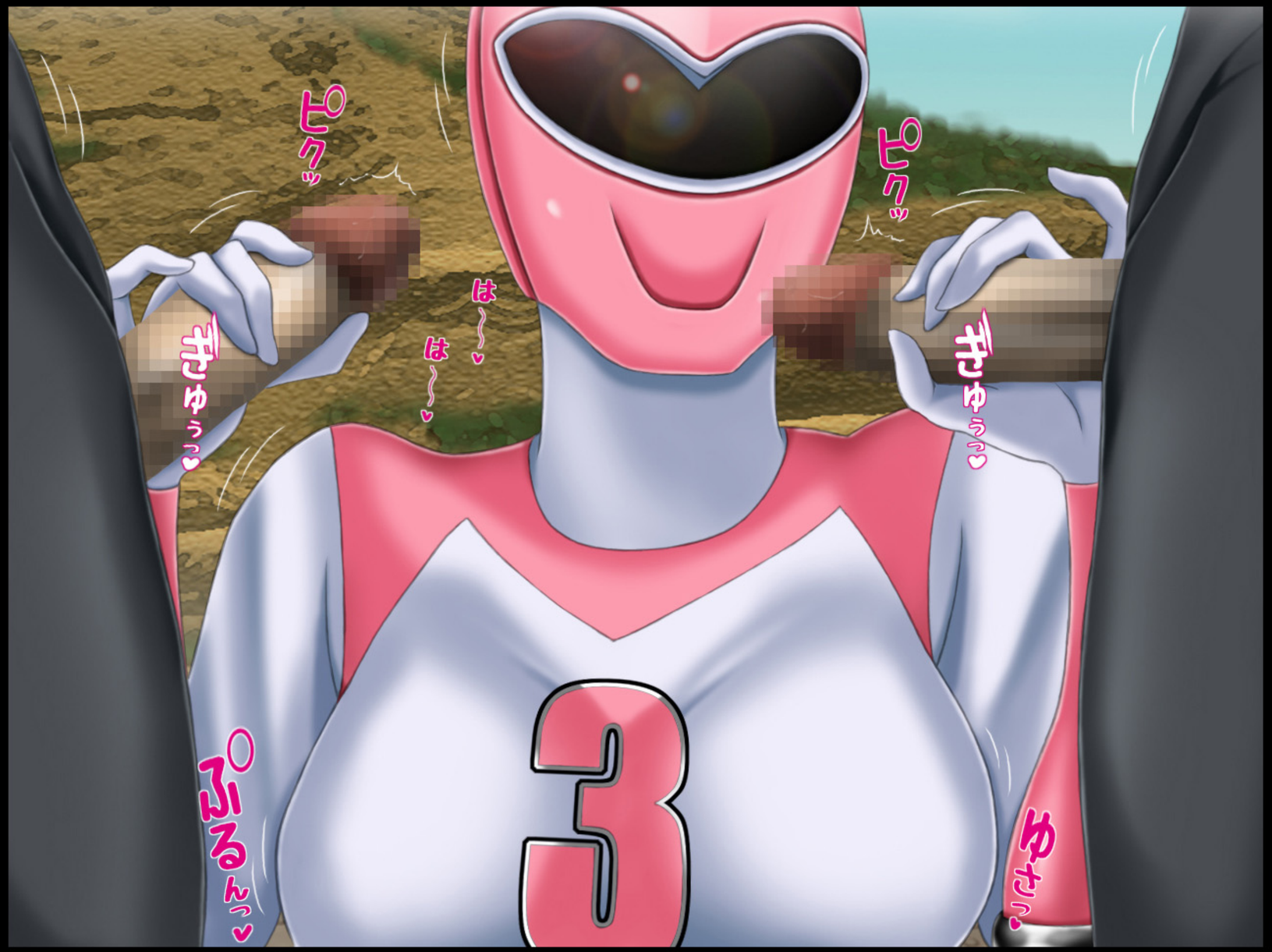
「情愛のブルマ！　ブルンレッド!!」
「博愛のブルマ！　ブルンブルー!!」
「親愛のブルマ！　ブルンピンク!!」
各色の女戦士たちが名乗り終わると、三人一緒に声を揃え――――

「ママのブルマも愛してね❤
ママさんバレー戦隊ブルンジャー!!」





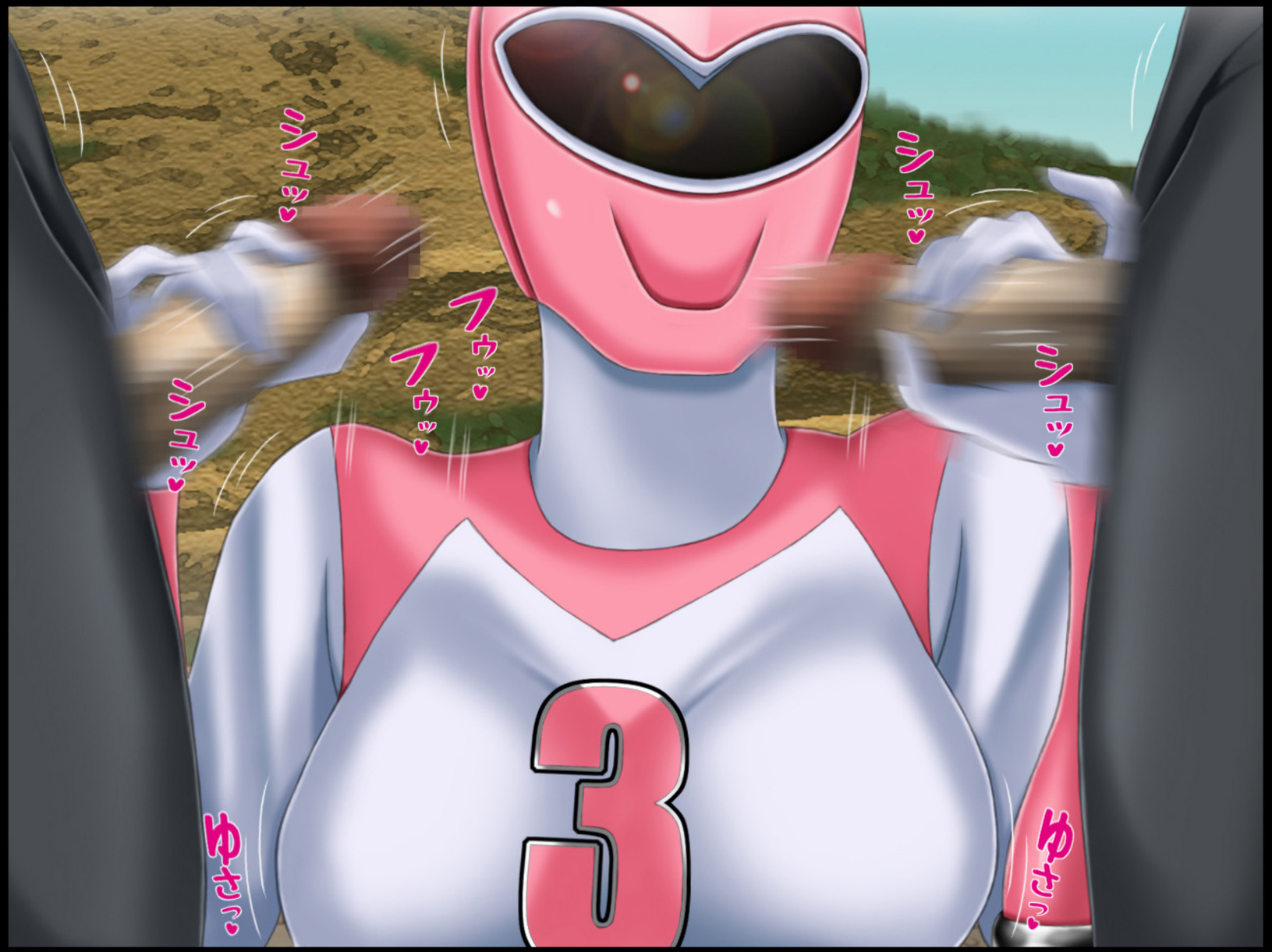
採石場。
ブルンジャーたちは場所を移して戦っていた。パンチやキックを繰り広げ、戦闘員たちに立ち向かっていく。
そして、ブルンジャーの掌に粒子が集まり拳銃が出現。
「ブルンガン！」
エネルギー弾を次々に射出する。
更に、ブルンパワーを込めて――
「ブルンナックル！」
レッドの打撃技が炸裂。
「ブルンシャドウ！」
ブルーの分身技で敵を惑わす。
「ブルンシールド！」
ピンクの防御技で敵の攻撃を防ぐ。
しかし、ブルンジャーにはまだ強力な必殺技がある。



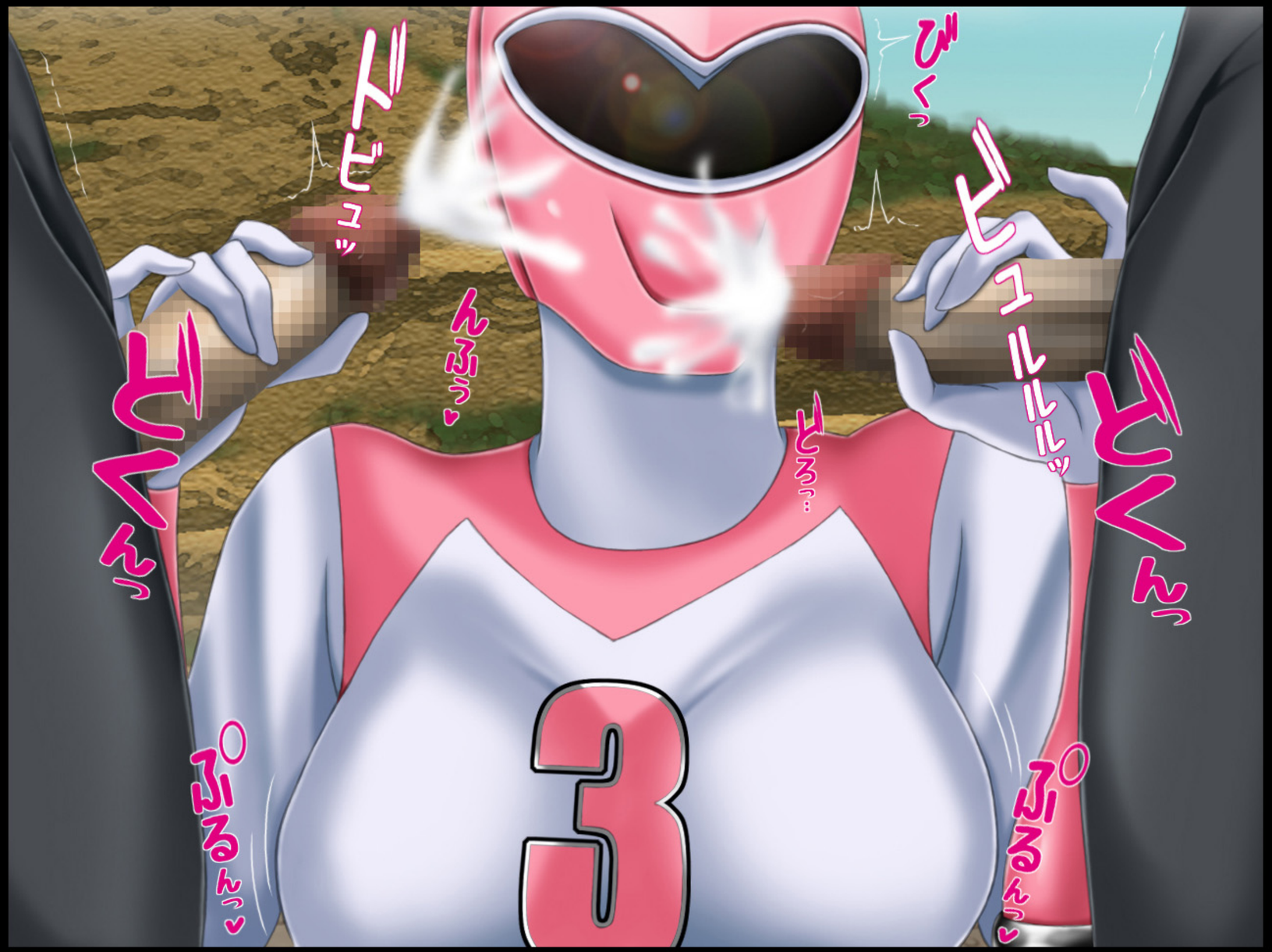
「ブルンワイヤー！」
ピンクがそう声を上げると、ブルンジャーの専用拳銃ブルンガンの銃口下部からワイヤーが射出され、戦闘員二人の身体に巻きつく。
「チョウッ!?」
「チョ、チョウッ!?」
動きを封じることに成功。

ピンクは動けない戦闘員二人に近づくと、彼らのペニスを取り出し触れる――すぐに勃起。

「クスッ……立派なモノを持っているんだね♥」
極薄の白いハンドグローブに包まれた指先を、幹に絡めていく――。
「パンパンで辛そうだね。今、楽にして上げるよ♥」



「高速手コキクラッシャー!!」
ピンクが必殺技の技名を叫ぶと、戦闘員二人の勃起ペニスを扱き出す。
ストロークの速さは、素人がする手コキと変わらない。
だが――――



「チョウオオオッ❤」
「チョウオオオオ――……ッ!!」

ドビュルルルルッ！

手コキを開始してから、僅か三秒で戦闘員たちは快楽の叫びを上げて絶命した。

ブルンパワーを帯びた手コキは、通常の数十倍の性感を敵に与える。まるで高速で手コキしたかのように早くイッてしまうことから、《高速手コキクラッシャー》と名付けられた。

ピンクはマスクにこびり付いた白濁汁を手で拭うと、
「よし、次っ！　かかってらっしゃいっ！」

今度はブルンブルーの番だ。

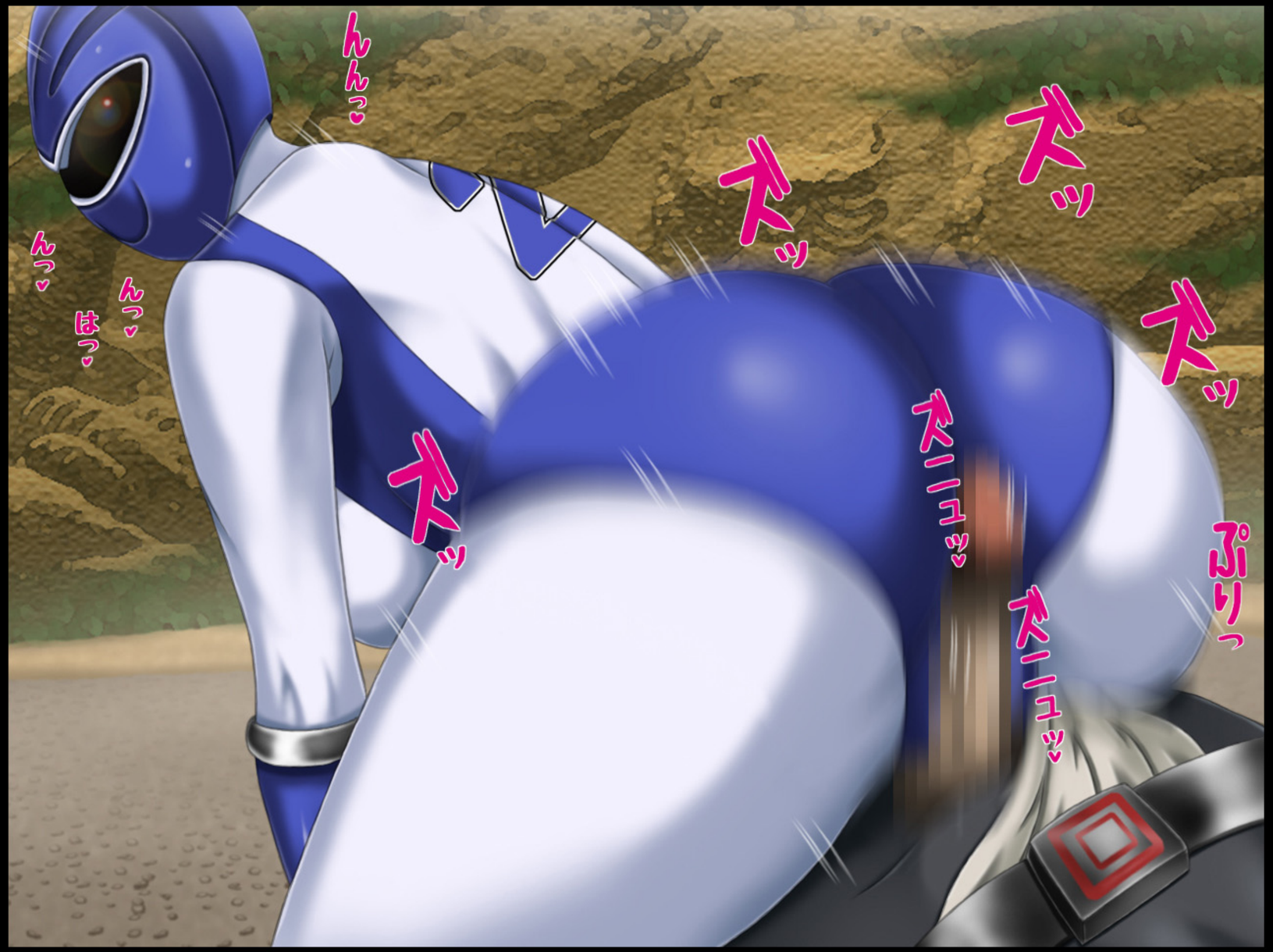
ブルーは、割と活発な戦闘員をワイヤーで拘束すると、仰向けの体勢で寝かせた。そして、素早く背面騎乗位の姿勢で戦闘員の腰に跨ると、肉棒を巨尻の割れ目で挟み込む。

「チョウ……♥」

戦闘員から恍惚な吐息が漏れる。淫靡な光景である上に、ボディースーツの生地が極薄のため、柔らかい女体の感触が伝わってくるのだ。

スーツ越しの肛蕾に触れていることも生〻しく分かる。

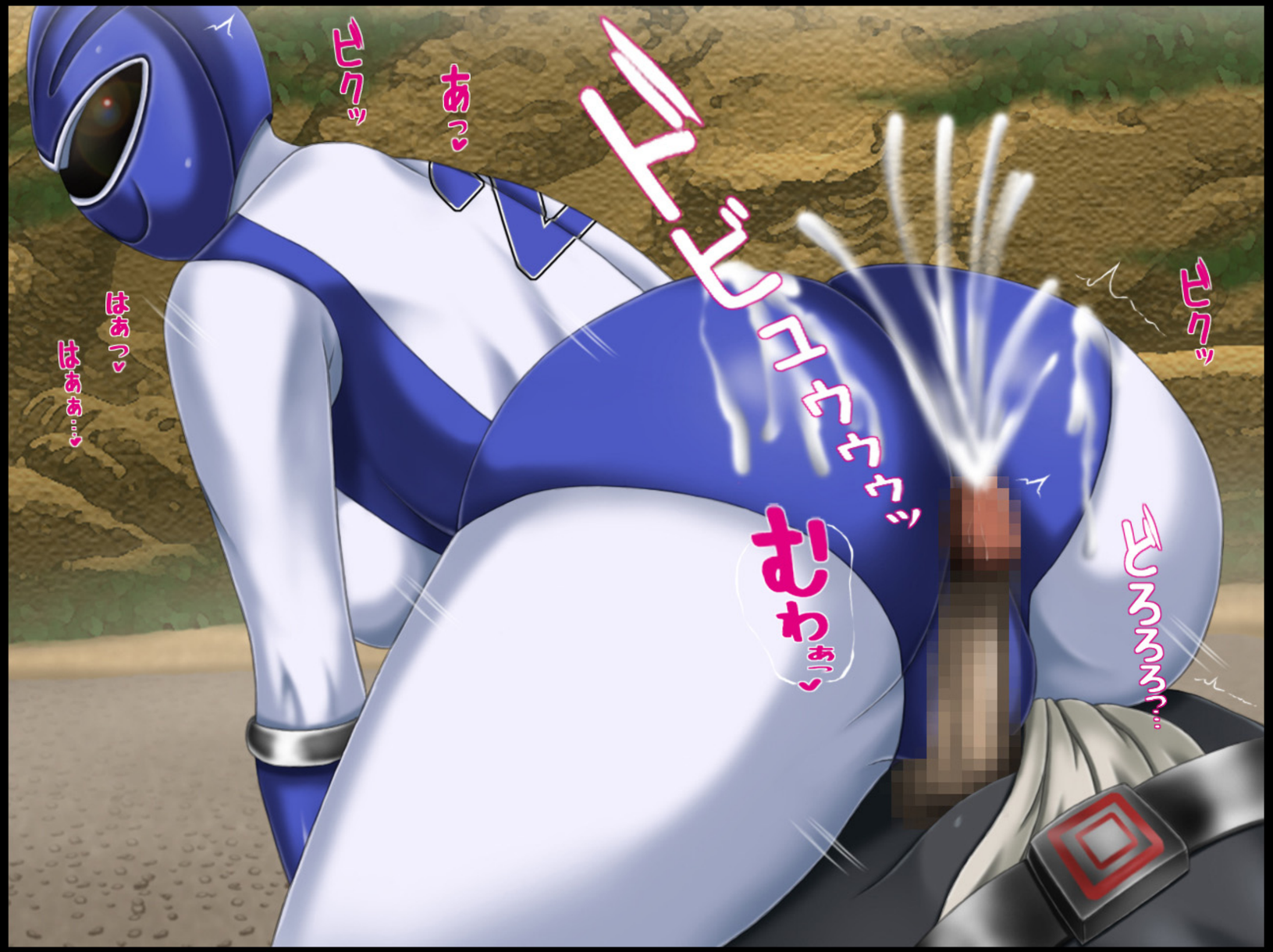
「さぁ、いきますわよっ！」



「高速尻コキクラッシャー!!」

ブルーの口から技名が発せられると、戦闘員の肉棒を尻で扱き出す。ピンクが発動した《高速手コキクラッシャー》の尻コキ版であるが、威力は尻コキの方が高い。タフな敵に特に有効である。

手コキや尻コキの必殺技は、ブルンジャー三人とも習得済みで、連発も可能である。



そして、手コキと同じく僅か三秒で――

「チョ、チョチョオオオオ！」

ドビュウウウッ！

戦闘員を射精に導き、青色の大きな尻に白いザーメンを受け止める。

「次は、どの子がわたくしのお相手かしら♥」

そして、怪人クラスの敵が出現したら――
三人の合体技――ブルンジャーアタックがある!!

レッド、ブルー、ピンクが持つ三丁のブルンガンから放たれたエネルギー弾が交差してぶつかると、一つのバレーボールサイズの光の玉になる。
そして、光の玉が高速でピンクに向かってくる――

「それっ!」
ピンクがレシーブで弾き返す!!　飛んだ先は――

ブルー!!
その玉を受けた彼女はトス!!
「レッド！　後は任せましたわよ！」

「分かったわ！　ブルー!!」
ブルーのトスはビル三階分の高さまで上がり、その高さまでジャンプするレッド。
そして――――
「勝利の悶絶スパイクよ!!」
レッドがスパイクした光の玉は超高速のスピードで、怪人の股間に直撃――――!!
怪人は身悶えながら地面に倒れ伏せる。
敵をやっつけたブルンジャーたちは、静かに立ち去っていくのであった――。

今日も地球の平和を守る彼女たちの名は――

ママさんバレー戦隊ブルンジャー!!

第二セット　再会

夕方。彩沢市。

雨村圭太は、仕事が終わり会社を出た。

「今日も一日終わったぁ～。ん？　アイツは……」

「圭太！　久しぶりね！」

「茉利奈、会うのは春以来だね」

圭太に話しかけてきた女性は、川島茉利奈。圭太の幼馴染みだ。圭太と同じ会社に勤めていたが、今年の春に寿退社をした。彼女が結婚してから、連絡はするが旦那に悪いと思い、あまり会わないようにしていた。

「これから家に帰って寝るだけでしょ？　目の保養になるところに連れて行って上げる❤」

茉利奈と二人で夕食を済ませると、小学校の体育館に連れて行かれた。そこには――

ブルマを穿いた熟女たちがバレーボールの練習をしていた。ブルマは濃紺色で、下半身をぴっちり包んでいる。腰の左右や、尻肉のむっちりした曲面が艶かしく現れている。ジャンプする度に、巨尻がムチムチと揺れる。

圭太は露出度が大きい太股や、ブルマ尻に目が釘付けになってしまった。

着替え終わった茉利奈も昔ながらの体操着で、圭太の元に戻ってきた。他の女性と同様にブルマ着用である。

「十代の頃のような若い気持ちになりたい」というチーム方針を掲げ、選手たちはブルマを穿いているという。試合ではショートパンツを穿くようだ。

「ど～お？　殿方には良い眺めでしょ～？」
　茉利奈は赤面している圭太の顔を覗き込んできた。
「はは……茉利奈もバレーやってるんだ？」
「うん、高校のとき以来だけどね。主婦をやっているだけじゃ太るかなって思って。それに夫は多忙で帰りが遅いから、一人で家に居てもね」

「ところで、どうして僕をココに連れてきたの？」
「うん！　圭太にどうしても紹介したい人がいたの。わたしも、ここ彩沢レディースのチームに入って、再会したんだけどね……あっ、いたいた！　美由紀さん！」

圭太は、近づいてくる女性の方を向いた。
「えっ!? もしかして、あの美由紀さん？　僕が子供の頃いた町で、ご近所だった綺麗なお姉さんが目の前に……」
「やだぁ、もぉ～綺麗なお姉さんって歳じゃないわよぉ。オバさんをからかわないで。でも、本当に久しぶりね、圭太君！　会いたかったわ」
「僕もです！」
「美由紀さんと圭太と、もう一度こうやって三人で話せる日が来るなんて……わたし嬉しくて……」
茉利奈は、感激のあまり泣き出しそうになる。

美由紀は圭太たちが子供の頃、よく一緒に遊んでくれ、兄弟のいない二人のお姉さん代わりにもなってくれた。
だが、美由紀の家が急に引越しとなり、連絡先も交換できないまま、歳月だけが流れていった――。

「今は、寺岡姓を名乗って、娘が一人いるわ。圭太君は今、どうしているの？」
「僕は、しがないサラリーマンで、まだ独身ですよ～」
「まだ若いんだし独身を謳歌したらいいじゃない。彼女はいないのかしら？」
「いませんね……」
「そっか……あっ、もう練習に戻らないと。良かったらでいいんだけど、練習終わってから、私の家でもう少し話さない？」
「はい！　僕ももっと話したいです！」
「ありがとう。私たちの練習でも見て待っていて」
（美由紀さん、今はちょっと肉付きが良い感じになっちゃったけど、当時のように美人だし、むっちりした量感はそれはそれでいいなぁ）

寺岡家。
彩沢レディースのキャプテンでエースでもある美由紀は、バレーの練習が終わると、圭太を自宅に招いていた。
「すみません、車にも乗せてもらって……」
「私が誘ったんだから、気にしないで」
「あの……美由紀さんは、ブルマを穿いたまま、体育館と自宅を行き来しているんですか？」
「そうよ。車で通っているからね。帰宅しても、寝るまでこの格好でいることあるわ。動きやすいし、何だか圭太君たちと一緒にいた昔を思い出すから、ブルマ好きなの」
「その……僕はずっと美由紀さんともう一度会いたいと思っていました。いつも素敵な笑顔で優しいお姉さんで……それが突然いなくなって寂しくて……色ゝな人に引越した場所を聞いたんですが、分からなくて……」
「ありがとう、圭太君……そこまで思っていてくれたんだ」

「……ぁん……メぇ……っはぁん」
「――!?」
二人の会話に間ができたとき、二階から艶かしい声が聞こえてきた――。
「……ごめんね。娘だわ……。彼氏を部屋に連れてきているんだと思う……」
「……そ、そうですか……」
顔を赤く染め上げる圭太と美由紀。すぐに会話を再開しようにも嬌声が気になって、なかなかできない。
(美由紀さん、困った顔をしているな……。もう帰った方がいいよな。家も分かったし、また遊びに来よう!)
――が、立ち上がった瞬間、股間にテントを張っていることに気付く……。
「あらぁ……❤ 若いわ……まだ時間、あるわよね……?」

ママさんバレー戦隊 ブルンジャー

登場人物 紹介

寺岡美由紀（てらおかみゆき）。ブルンレッドに変身。
３６歳。既婚。娘の有紗がいる。旧姓は立花。
色っぽく母性溢れる主婦。
彩沢レディースのエースでキャプテン。スパイクの威力は地区トップクラス。

速水麗子（はやみれいこ）。ブルンブルーに変身。
３８歳。既婚。息子と娘がいる。旧姓は一条。
セレブな雰囲気だが人の世話をするのが好きな主婦。
彩沢レディースの副キャプテン。スパイクの速さは地区トップクラス。

川島茉利奈（かわしままりな）。ブルンピンクに変身。
２５歳。既婚。子供はいない。旧姓は西澤。
明るく気さくな主婦。圭太の幼馴染み。
彩沢レディースの選手。レシーブが得意な地区トップクラスの守り手。

熊山紀夫（くまやまのりお）。
５７歳。既婚。会社員。彩沢レディースのコーチ。
陽気な性格で的確な指導をするため、選手たちから信頼されている。特にエースである美由紀には付きっきりになって熱心に教えることも。

西脇来駕（にしわきらいが）。チャラ男。
美由紀の娘・有紗の彼氏。女泣かせの巨根をもつ。
たまに寺岡家にやってきては、有紗と彼女の自室で性交をして帰って行くだけ。だが、帰り際に美由紀を見つめる目がどうも怪しい。

雨村圭太（あめむらけいた）。本編の主人公。
２５歳。独身で彼女なし。会社員。
優しく真面目でお人好し。
子供の頃に憧れていた美由紀を今でも忘れられない。

ブルンレッド。ブルンジャーのリーダー。
攻撃力に優れている。
打撃技ブルンナックルで敵の固いガードも崩すことができる。

ブルンブルー。
敏捷性に優れている。
見た目から想像できないが、回避率が高く、敵より先に攻撃することが得意。分身技ブルンシャドウで敵を惑わせる。

ブルンピンク。
防御力に優れている。
見た目から想像できないが、打たれ強いタフな身体。防御技ブルンシールドでブルンジャー三人を敵の攻撃から守る。

チョウベイ将軍。
闇の百八軍の幹部の一人。
ブルンジャーの情報を収集し、分析し、ブルンジャーを苦しめる頭脳派。

イセモリ将軍。
闇の百八軍の幹部の一人。
地球侵略作戦の戦いには、ほとんど参加していないようだ。百八軍が地球に来てから、将軍の姿を見た者は数少ない。

闇の戦闘員。
闇の百八軍の最下級兵士。
「チョウッ！」とよく叫ぶ。

・闇の百八軍（やみのひゃくはちぐん）：地球征服を目論む宇宙からやってきた悪の軍団。
・ヤオ総督：闇の百八軍の首領。

体験版は以上です。
体験版をお求めいただき、誠に有難うございました。
続きは、製品版でご覧下さい。

地球征服を目論む悪の軍団・闇の百八軍。
ここ日本でも百八軍の侵略に市民たちは苦しめられ
希望を見失っていた。
だが――
「アナタたち！　おいたが過ぎるわ！」
正義の戦隊ヒロインたちが、街で暴れている戦闘員
たちの前に現れた――
彼女たちは――ママさんバレー戦隊ブルンジャー!!
ピチピチの強化スーツを装着し、ムチムチの女体を
さらけ出しながら、市民のため戦うブルンジャーであ
☆　☆　☆
優しいがどこか冴えない雨村圭太は、幼馴染みに
誘われ、ママさんバレーチーム・彩沢レディースの
練習を見に来ていた。そこで、子供のころ憧れていた
綺麗なお姉さんに再会するのであった。だが、彼女は
バレーの練習中も、股間が疼いて困っているという…
青い地球を守るため、青年は今、動き出す！